



~ 13
3111
2





暑小説打出賃卷之二

南里亭其樂著

第五回

風小鼓山吹

備も正々又々妻具井八娘が恋聲ねをよの縁紐を切て断ち又半纏の
 見合の辰ふあり一と平ふ足切りの聲始及も見合ふ必ぶまじく
 思どもお堅きまされ明内お音も出されば知らぬあり一と排多
 かどぐ見合せ一と案の外ある麻痺が音多何とも不審乳母の少女
 小尋一と小夜一とも致知を定ふ晋七を招き一奉あるハ晋七を
 何とて知るえ持せ一と貴岡小晋七も元来知らぬ言の進ども
 松葉井筒の段と作られぬ番系様の外小晋七ふくゆへに松葉を採り

丁巳ノ實 卷之三

せしる事 河津川より尚月帰る小連立むいーと八ね追探少も控しほ
存トの由作られぬ是迄まで及んで控室ふと私の存せしむらひは母
巨小計に於て遠く控室控しきうーと手申して止ざりしふれは云々
某も抑高思ひく菴系父子を人へてせしむ遠く我懐の者どもも
う衣服大小花火を好む勿論は舞平中りといふも僅ふ又百石の主あねを
大辨をも分限小意と苦るふれ者者富くく麻智を嫁人の思ひ
もいふと立腹の指子あり一由まとい娘まをお遠の縁辺今さらんれ
と冷方そりふれ控しも言聞ふ安中一して入束人けつと告るふ誰と云ま
自ら出迎ふるふれ別人ふらべ則菴系控しをさるう云々ふ向い某菴系大
学は控し進と申者るるが先達と息女を宿の事ふや清人と兼料二控し

もつと味人うーいひ一ぬ子連立は下されけし合と一國吉田
控せしふれおの近接おちるふれやと問うけられて云々又微知一とこれ
初ては来何事うと存せし控縁辺のま作越さる一ふやけ者控者方ふ
元束をふもあれる一且つやせしふ再進法ぬきされ一也縁終の條控
の心におもるふれまゆ人合の上ふ納得控しを結ばとどろーとことや
且束條を控しとすふもそあくは遠物ゆらねとるたろし怒憤をふ
も乃び僅そ縁をふとすとのとせも果び大音ふらだまれ云々
室あるゆりのが香るを控せしと日外より十束の絶書をと送り紙
せし何事ぞやふれと好む縁辺る一れと再進の控しは怒り
控しをふれ内富里控し母のふ夜中宮傳とて老向より味人を

丁 貴 卷 二

於これ中あり也三哲不中會味人をせ一交右の仕合あり一也今日
 推来して怒り中入夏下の函言は身好きもはまきまき一するも
 ね進武士あり女事の慰ふられて武士道おまじゆ極めする
 せよ云々々と取小力の柄小子をかけし憤達面小取れられ心ま
 事毎不雷地方より宛書を送う一するも門達ひ然し実不
 送る程の者か入合して遠交ささやそれ小児の戯れ小守一
 言あり不肖るまで直井云々まが娘親の洋の客通被さるりの
 るは疾滞られしと増々怒り親のゆらぬ不祥せどと云々後備言
 女痛より送る一取通はみおる事もあんとておま一するも
 まい下し様中より中一するも手裏通をえ上られ疑いもするも

るま何とも合点必成と取度う五しく女房異件を叫出し一も眼小
 おおと不祥の境あり一とも思ひし小斯狂ある自家の籠事小母の事
 まで書添りるる方知らざる更らるまト麻酔も呼でれぬせん不祥
 極の行儀中伏の筋はは喉音と一と小始終の指子お陰する未
 一事あま今又何と凶言もはよりおのりぞる一乳母の小夜茶車
 小走り来り両親も大強初こそ来さう一するも寮人の心取
 知自に編み玉い一や例れし居る心悲一をも悲一をいし
 助け下されがと大声揚くはるるふぞそれ人愛と云々又異件とも
 走り入ねをも送る付て麻酔を初屋一取り見る不便さうも娘麻酔
 小腰帯かて編み玉し心云々まはるる異件に程事のぞく乳一



麻野

具竹

正大夫



松之進

娘はあまの事にて母小歎らそと見よとて可きものやいづら一も押
 初りては悲しし傍ら通の書さゆり及ぶと助言をいふふ去れども
 を見初てより恋の病とまでしを母と乳母とを情うそそ人の使を
 けく病もぬ小使言一と世にれはるのこも思ふ人よとてさく何せ
 けつら遠せしやもあぐり合ふ事とてもせん角やせまるとおりの
 いども不冷雨靴のやうにをはけ不祥の客通せしうい菴系式に儲りの
 とあつたを旅の面を清し父上までは贈りけけいひはれれいとの
 不慮るれいせめてりの中次文をすしいと細ぐとの書さそとすの度く小袖
 不便と思ひも武士の美地は捨別してさきまを改めねと進敷もはる
 のあつた者も改ねもあつた娘ははれはれさの美言をいひ不祥の客通

小飛りる娘とて用持いふし付て廢人と存せしれ自縊て死するるを
 まごりの事い見んを疑ひを晴しとても無縁はけさらあ下されば
 と心しと言ふおね進も冷方なく俱小使を授けりしは次おるるあ
 情て流るる悲しとて何時迄愛ふまこと袖を拂く退出てりしは流るる
 ごとく女賢くも平賣とて是れ小夜い今おるる心もまたお村い言次
 なく付小使愛娘を可き余の余病と助言を却て夏同んるるの悲
 ぬもまも難直らねはる母を誂め私とも端折かこの時をさしおるる
 いどももさるる宿世の因縁とての近歎さし流るるを返して帰るる魂
 とはつらとておねはれとて慰かして使るるれはる書さそとて心はく
 娘が人いおねをそとお有るるさるるも御某も同んせし何れも

不審る人自は狐狸の如いの所為なる何れもせし不孝なる不孝
 あり先立りの先祖ありと土俗の風俗にまをりていふ人やけ青上二
 便けし人とは早速彼命申へお便け時申の言を為さるり一折りも大
 降さるりて小止るれは墓所の傍る草刈に昇入りもまをりて今夜
 宿せし明朝雨晴て埋葬さるり一と菴主悪頂といふ傍わりのを程
 通夜念佛ト玉れとて皆さるりい宿所さるり

牙六四

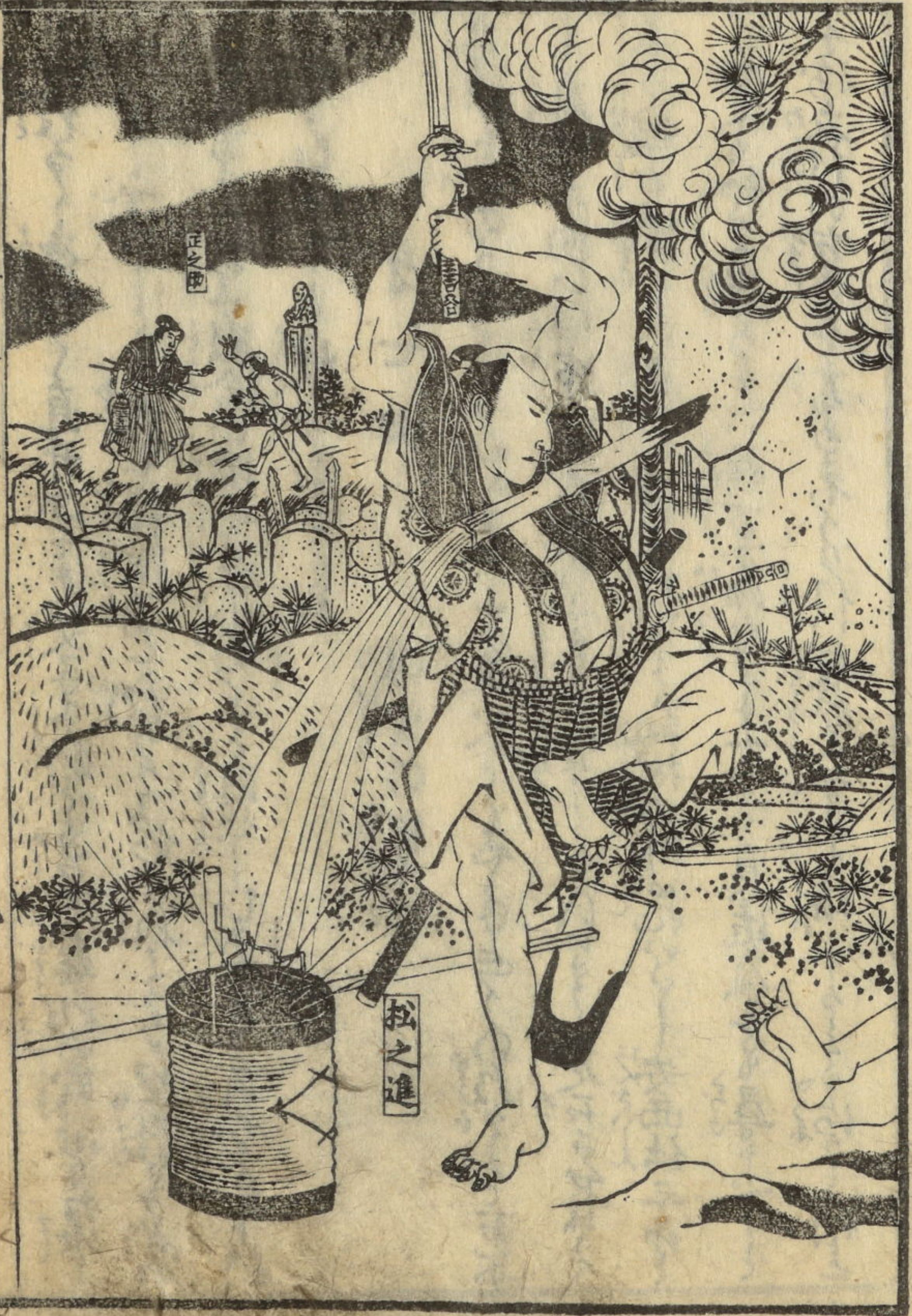
根小環糸花

菴主悪頂と直井氏の子の模範をいへる老翁不定の理にいふ
 多し称名念佛して有縁なる海夏さるりふしては身小夜も深
 なるんとして何れもさるりうと人のうめく声さるり候も思ふ

坊々その声れをきき早世三頂と禁りしと小人の来たる用事何者
 たりしと狐狸のうごいやとせとぬせを傍の棺桶のうち声五
 こい不審と縄を解蓋を明き娘麻登いふ一語も付は経帷も
 此院志と立一有縁と思へる人といふ事りる一秋事でもゆつ悪頂
 来世土の法心さるりゆつるれ物の教も思ひ人の死るる亡骸を
 て狐狸の悪増を唱とる人余人もいふ是悪頂は精進欠書念佛
 上南無阿彌陀佛くと称名教編とる一て除殺する除くも消
 身を揚ぐ中上は傍自らいふ愛のりのふは直井正といふりの娘
 麻登と申りのふは縁談のふは付西親の面皮も抱る不義を
 是を不審とさるりしゆ自ら編記さるり一が定業とるべしと
 候事

賤家の者遠くへ本貞造殿をこそ安葬し申さるへ菴末氏半郎
 御座をいさるるをば討つとも一尋せし心ありまへ。本貞氏の嫡子貞造殿
 不細法の世にうけて思ふの身とてうへ方も小指するとの風せぬ中も
 角もいさの不便るるを思ひいさるへかへ菴末氏へ嫁むと縁む言ふ
 初め人の名木をすねて進み遠くせしものうへと先絶を悔しうと
 本貞氏と申すいさふもいさなれば又され給さるへ遠方ふまへりしがとも無
 人ふはれぬ方うへふなりやのゆふふと又も猛人お孫なりしと思願歩
 く初めで思ひ結ぶゆりの系何れ人の行儀もねば人とはあましくおなご
 人間界ふまへも文字事容易ふふはゆらば朝ふせれてのふたとも可なりと
 いさしていさふ獲せし申す程の果報あるまへその人をも身はけ人とは

云甲斐と申す。と理ふふせあらはれくるるるる。何れども獲せしとせしむる
 菴末氏へ嫁し父上の武士に立ね不孝と申すとも不孝不端なるもの
 ふもして此れを立退貞造殿と申すの行儀をうへのお思ふ心の程をさへ
 せむも角もとらるへ哀れに傳へるるを物あいつくいふとも伴いむらん千辛
 万苦してめも悪人を尋ね下け奉差下されと涙とたふかさで呪い
 頂も殆ど迷惑せしが懐か入行をも助けぬも仁るれおれら。申すて出家の
 身もさへいんとともうへかへし。いさふ此候て連行はばて家を難べれば
 今夜は菴かきその後お忍び棺桶を事ある埋葬して明をんおそ
 立退人先棺の中へ何れもへて欺人と猜ふふ合さる神小助け成る石
 のおふと入麻野をなすその後堂へ強し知らば親して夜の明もまら



はる程く夜ぬく直井は其父下りて夜更の式に母おぼ
上はま埋下りて穴を塚棺桶をぬきりておぼれりて麻野の
上と云ふ親子殺合の洞歩のふあくとほ照しむをくらりて下り
まがひとく杖をまわりのふ

第七回

根曳の瞿子

忍頂を日のうらやう心かま下りて夜更ともやまのうのなをを色小
一麻野小向い結帯しり人目小きく回しうぶいまは足下せい
上方廻玉幸るる愚傍が梓系初ふく細柳の昨範いし安西伝三帯と
して人も知る者るまは梓方落付き上りて貞遠屋をも尋下りて
本孫衣取の古むを奪め来りりれ麻野の母も疑しりて何と

心付むるるおし人目小をのうら夜更にたれて落行人と縁洞歩結
用の結帯ふく用意していざ打まんと忍頂麻野を先ふとて親子のどく
出きて別一古むを流ふる一都せさしてせりり好事門を吐び悪事千里
を走るもやゆ忍頂の夜の因小落矢一ゆ初る人あまたきとゆりども
一日言とて行くと流るるももも忍頂坊をも直井の娘をけきて欠落
しなくおし見かけおまの者なく坊主もりりて街の風流通くるりし
也へあつて菴原成吉一ぶさしでふ謎の思しねるるも風流に
といと一も一夜の沈吟おも及び憤送しる直井方来りてい
を父通る直井ふまの橋りの菴原松をも向る子細わつて出
五言せよとて多ゆりりれ道井の志向大お尋るる下りて心まふ者り

一、心なきを微笑して待たける程を何事と云ふ事ありを周知しきば
 遠く客問ふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 残る事なれども客問ふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 るくて待たる事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 下立ゆふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 まゝ承る事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 一、心なきを微笑して待たける程を何事と云ふ事ありを周知しきば
 遠く客問ふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 残る事なれども客問ふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 るくて待たる事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 下立ゆふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 まゝ承る事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と

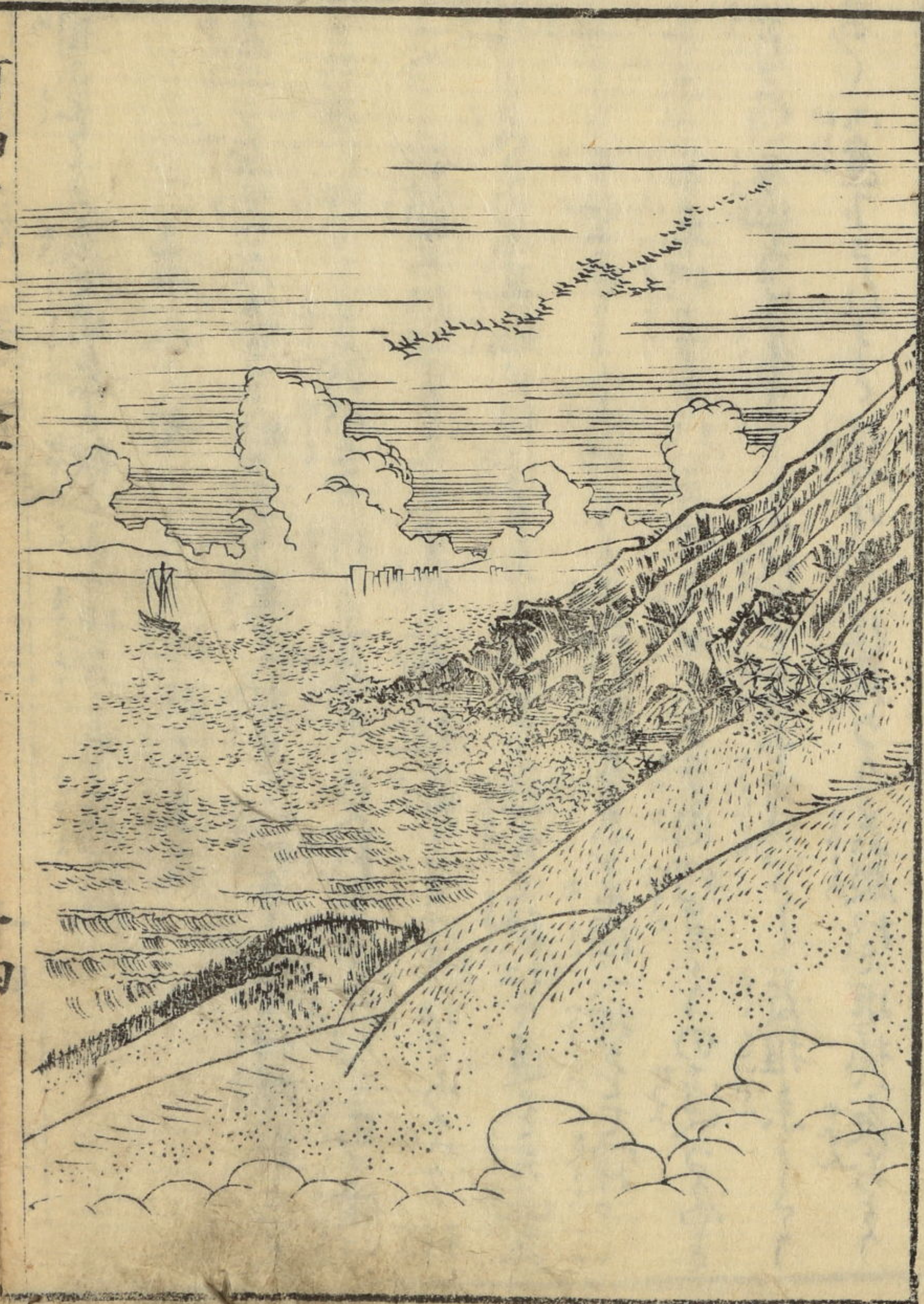
一、心なきを微笑して待たける程を何事と云ふ事ありを周知しきば
 遠く客問ふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 残る事なれども客問ふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 るくて待たる事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 下立ゆふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 まゝ承る事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 一、心なきを微笑して待たける程を何事と云ふ事ありを周知しきば
 遠く客問ふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 残る事なれども客問ふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 るくて待たる事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 下立ゆふ事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と
 まゝ承る事とせむをば一抱く事なれども不承る事と云ふ事と

桶より埋虚はして海にまじりてはれ小舟も多しなれど今迄言せしが儲りては境を
 へりまゝ見せしや否と告ふぞれは何れか心ありた程を疑ふる好まぬものな
 りゆも改暮半しして後ふ令ど一枕今日も寝て明日は人々の好むを
 いせくまゝ明日とて又いつる謀計をせしむ知れぬは次夜中でも苦しむ
 刻も改られし井立れど此の及ばば我六作の落しは日多しとて下終
 打し人もせむとて先ふ立暮半しして暮らる程よく暮れぬとてさ
 下終用事をせしぬ細く度いしとて改除節附しして棺桶の渡りてはれ
 空まの無事とて改しぬく人々の死をも改除節附しして棺桶の渡りてはれ
 と憤息と發笑とをいふと人々の死をも改除節附しして棺桶の渡りてはれ
 後始りしが改進先刻より下終の渡りてはれと自ら改除節附しして棺桶の渡りてはれ

の出るは人々中直井どの出た小及び女を我を欺んとは思ふりてさ
 改られしと改りけられし事をいひてさすを解せ蓋を除去しとて
 ればお前小娘がた骸のいのちもさうとてさす石を端を四折をいへさうとて
 進大音揚おこそその風字小遠に尾尾を棺小入用をいへ埋蘇
 して人々欺る麻也と暮半の坊主小たのちもさうとてさす小亮さうとてさす
 上六連小娘のいふを白状せしと信まざる空まの無事とて改除節附しして棺桶の渡りてはれ
 人々の好むを改むる光景さうとてさす小娘が縁後の笑物せしとてさす小娘の
 某を傳うかろとてさすとてさす暮半とて改除節附しして棺桶の渡りてはれ
 入付は小舟の岸に心懸のさうとてさす麻也がた骸何れに隠せしとてさす
 中どしとてさすお徳めをさす老老の戯言をいへ子もさうとてさす人々改除節

此場を喜ぶも此下人を待たせざる思ひおきてさうり子に授けし
 さまを春の山中をたけさふ切せり何れもつてなまらざるを例れ
 事めて斬殺をせんとさう下殺も驚きおきておぼろしく
 とい直井心も物に授けし帰る時おぼろしく一個小灯をとり三昧と
 来る河を拘絡をさればいづく葉ト意を暮をくまうしつりや
 帰るしつり人々神灯もいづくお静なり由公はぬゆる船途中
 ざら何れいづくゆきまきしやと祈るる後より心も更なる行
 ころのぬり退け行なりと腰の双を切付られ驚き例も河のぬり
 は真なりと刀を授けんとする本をさう向より切られ二言も
 親とつ子といつ同日同形で人々お果るる無念といふも余り

二人を仕る意の意根の事候あり去りてもお小づらうし麻
 せしおれ遠るし彼坊より上りのぬり行先は神れりし
 う進けりぬり女は足弱るれぬり行なり夜を日小續人
 取捨の調を後よりやまし牌をさせぬ用証とさし出さるる
 のるおれ下しぬりもつらんと思ひしぬり小指子をとる人
 天晴の仕業をさるる尚時出頭朝比奈が家長討おれぬり
 作付られぬり正々父子私ぬり意根を付果るるぬり
 子ぬり遠るし何れぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
 るぬり父の教ぬり実小子をぬりぬり父上ぬりぬりぬりぬり
 度とぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり



自人の魂を報せしと志をかめり一言呉叶威心して乳母と
 汝が言ふ奴家のその心づいふまじも女の牙まきで縁は不ども
 定来りて業ト思ひ一ふくも思ひまむるりの郡上六日
 早く敷足せんと親にお後乃う一呉叶蝶公郎と西國順禮乃深おと
 らしつは亡人の骨控のつめ又つふ款の行儀知し一め玉と仲社
 佛園行く指とて初先知らぬ長の縁迄と執らる。定ふ又番系と定
 婦子ねと進る直井父子を付て己が大小を控正をまがは料と定
 行爲知らぬ出奔せし由心意恨むといへとも比無束縛の仕方不
 極ありとあり何となくと和の首尾とありしつらぬ虚病とあり
 て引込るねと進る馬ふしし直井父子を付て父お海用まで世の上

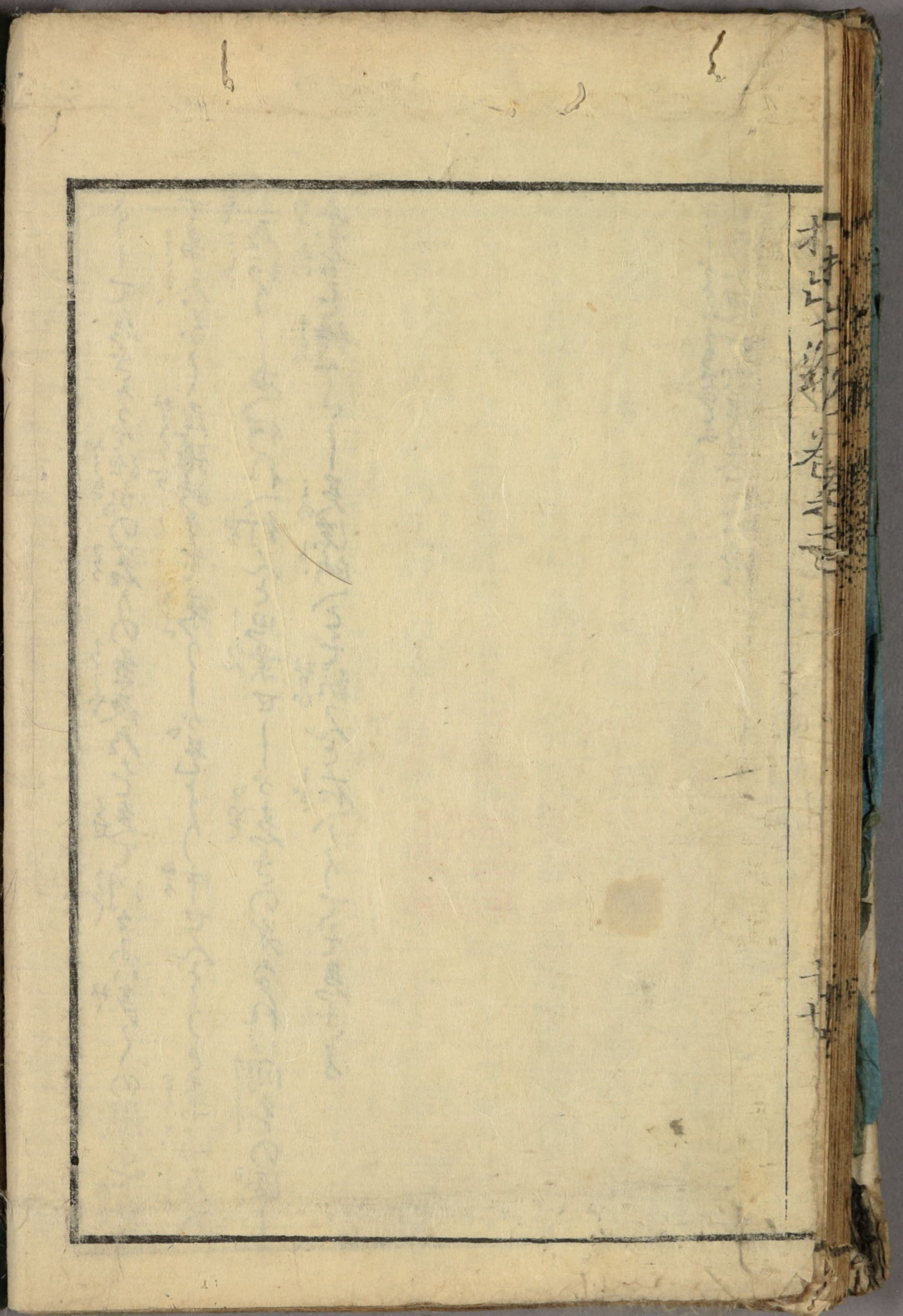
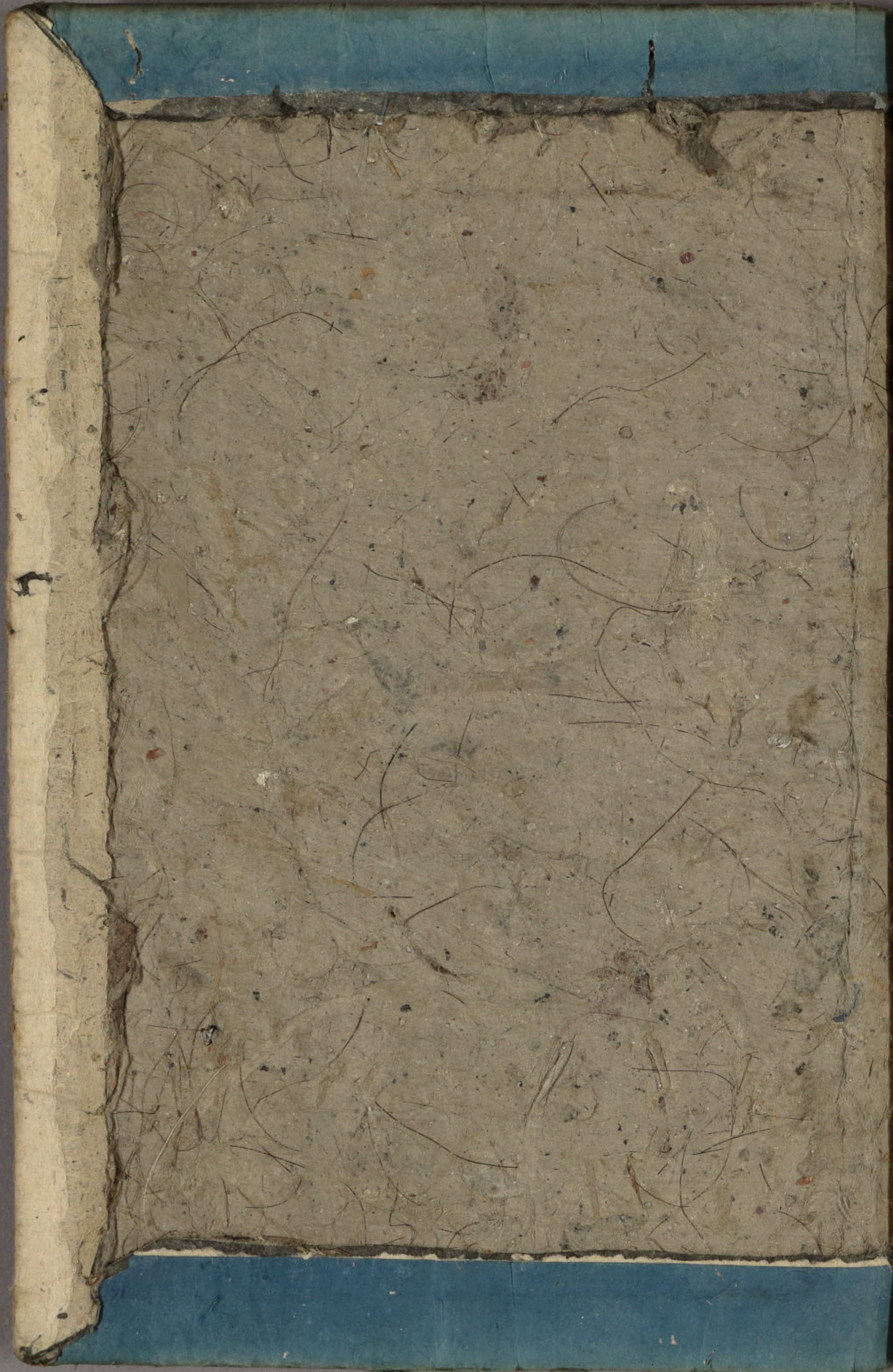
さして急ぎ急ぎが経死の若りの暮夜及をきて川々お多くの銀子と
 て事なふく尾張路まで来りしが是より申せんとうと東海路の
 二店つりし由何れ一行人と思案せしつらぬ急ぎの牙まきれ間をの後に
 業合を待たし一足懐路こそ執ると右とつてそ急ぎ急ぎ



目録小説打出度巻之三終

目録小説

目録小説



木山抄
卷之三

